

みことばの力を信じて

ルカ 8:4~15

主イエス・キリストは、ご自分のもとに集まって来た多くの人々に、よくたとえ話をなさいました。今日の箇所でも有名な種まきの譬え話を主イエスはされています。その話が終わった後に主イエスは弟子たちが理解できなくて質問に来た時に10節の「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見るのがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。」と言われました。この主イエスの言葉は、私たちの常識を完全に覆すものです。普通、たとえ話というのは、分かりにくい事柄を、身近な物事にたとえることによって分かりやすくするために語られるものです。ところが主イエスはここで、たとえを用いて話すのは「見ていても見るのがなく、聞いていても悟ることがないように」するためだと言っておられるのです。

それではたとえ話が語られる意味がないではないかと私たちは思います。しかしそうではありません。主イエスはここで、たとえ話の意味をちゃんと示しておられます。それは、「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。」ルカ 8:10 という所です。ここには、「あなたがた」と「ほかの人たち」とが対比されています。「あなたがた」とは、「このたとえがどういう意味なのか」と尋ねた弟子たちのことです。つまり、主イエスに従っている人々です。「ほかの人たち」というのは、4節に語られている、主イエスのもとに集まって来た大勢の群衆たちです。主イエスはこの群衆と弟子たちに「種を蒔く人のたとえ話」をお語りになりました。それが8節までです。そして9節以下は、群衆が去って弟子たちと共にいる時に、弟子たちの問いに答えてお語りになったことです。たとえ話とその説明が分けられているのは、このように、語られた相手が違うからです。ここには、群衆と弟子たちとの区別がはっきりと示されています。群衆と弟子たちとの間にはどのような区別があるのでしょうか。

「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。」という文章は分かりにくいと思います。これだと、たとえを用いて話すのは「ほかの人たち」つまり群衆に対してだけで、「あなたがた」つまり弟子たちにはたとえではなく、直接神の国の奥義を語る、というふうに読めます。しかしそれは実際は弟子たちも含めた群衆に語られたのであり、弟子たちはそのたとえ話の意味を質問しているのですから、たとえを用いて話されているのは「ほかの人たち」だけではないのです。これは実は翻訳の問題です。「ほかの人たちには、たとえで話します。」と訳されている所は、直訳すれば「ほかの人たちはたとえの中に」となります。つまり「ほかの人たちはたとえ話の中に置いてきぼり」ということなのです。弟子たちはそれによって「神の国の奥義」を悟ることができるが、他の人々はそれを悟ることができず、たとえの中に取り残され、「見ても見えず、聞いても悟れない」ままに終わるといふことなのです。ここに、弟子たちと群衆との区別があるのです。このことこそ、「種を蒔く人のたとえ」が語っていることです。

そこで、「種を蒔く人のたとえ」の内容を細かく見ていきましょう。種が蒔かれている間に、「ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。」のです。その意味を主イエスは12節でこのように説明しておられます。「道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないうちに、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです」。神様のみ言葉を聞いても、後から悪魔がそれを奪い去ってしまう、つまりみ言葉がその人の心に根付かず失われてしまうのです。「人に踏みつけられ」という言葉からは、それが価値のないものとして無視される、ということも感じられます。神様のみ言葉、教えに意味を見出すことができず、それを無視し、従ってゆくとしたら当然心に種が根付くことがない、そういう様子が描かれているのです。また「別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。」とあります。それは13節によれば、「岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです」。この場合は、み言葉を

聞いてそれを喜んで受け入れ、信じるのです。しかし、岩に邪魔されて根を深く張ることができない、いわゆる「根が浅い」のです。根が深く張られていれば、地面の上がカラカラに乾燥してしまっても、地中深くにある水を吸収して生き続けることができます。しかし根が浅いと、地表の気候の変化に対応できずに枯れてしまう。信仰も、根が浅いと、試練に打ち勝つことができないのです。また「別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に生え出てふさいでしまった。」。それは14節によれば「茨の中に落ちたのは、彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快樂でふさがれて、実が熟すまでになりません。」。この場合には、根が浅いというのではなくて、むしろ周囲の状況から来る妨げによって、せっかく芽が出て実を結ぶに至らず枯れてしまうということです。信仰においてはその妨げとは、「人生の思い煩いや富や快樂」です。思い煩いは、悩みや苦しみや悲しみ、つまり不幸です。富や快樂は喜びや充実感、満足を与えるもの、つまりその人なりの幸福です。不幸であれ幸福であれ、悲しみであれ喜びであれ、神様のみ言葉の種が実を結んでいくための妨げになる、人間は不幸、苦しみの中でも、また幸福、喜びの中でも、信仰を失い、神様から離れていってしまうことが起ることが示されています。これらの三つが、み言葉の種が実を結ばないケースとして示されています。それに対して、「別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。」のです。それは15節によれば、「良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」。これが、み言葉の種が実を結ぶ場合です。

以上が「種を蒔く人のたとえ」の内容です。私たちはこのたとえ話を読む時、当然ですが、自分はこの四種類のケースの内のどれだろうかと考えます。み言葉を聞いても、いつも右の耳から入って左の耳に抜けていってしまうような生活をしている、だから自分は道端のものだ、と思うかもしれません。また、一応み言葉を喜んで受け入れ、信じてはいる、だからこそこうして礼拝に集っているのだけれども、でも自分の信仰はいかにも根が浅い。ちょっと試練にあうとすぐにぐらついてしまう、身を引いてしまいそうになる、だから自分は岩の上の種だ、と思うかもしれません。ちなみに13節の「身を引いてしまう」という言葉は、前の口語訳聖書では「信仰を捨てる」と訳されています。「身を引いてしまう」というのは柔らかい表現ですが、要するにそれは信仰を捨ててしまうことなのです。あるいはまた、今自分は人生の思い煩いや富や快樂のまっただ中に置かれている、いろいろな苦しみや悲しみ、心配事がある、あるいは人生を充実させてくれる楽しいことがいろいろある、そういう中で、なかなか神様のこと、信仰のこと、教会のことに心が向いていかない、まさに自分の信仰は茨の中に塞がれてしまっている、と感じている人もいでしょう。この全部が自分のことだ、と思うこと人もいでしょう。自分は「良い地」でだけはないということだけは自信をもって言えると妙な自信を持っている人もいることと思います。

しかし、このたとえ話の大切な点は、主イエスの弟子たちと群衆との区別をはっきりと際立たせるということです。はっきりとした違いは何かというなら、それは、み言葉の種が実を結ぶか結ばないかということです。そして「あなたがた」つまり主イエスの弟子たちのことを描いているのはどちらか。それは実を結ぶ「良い地」の方です。つまり主イエスがこのたとえ話によって語ろうとしておられるのは、弟子たち、信仰者たちの中には、道端や岩の上や茨の中のような人がおり、たまに「良い地」であるような人がいるということではないのです。主イエスはここで弟子たちに、つまり主イエスを信じて従って来ている信仰者たちに、あなたがたは「良い地」なのだ、道端や石地や茨の中のようにみ言葉の種が実を結ぶことのない「他の人々」とは違って、み言葉の種はあなたがたの中で百倍の実を結ぶのだ、と語りかけておられるのです。主イエスのこの語りかけを聞き取ってこそ、このたとえ話を正しく読んだと言えるのです。

しかし私たちは自分は最初の三つの土地のどれか、あるいはその全部だと感じます。自分が「良い地」だなどとはどうも思えません。そしてそれは正しく健全な感覚です。自分は良い地で、み言葉の種を百倍に実らせている、などと思っている人がいるとしたら、その人は自分自身のことが何も見えていない、よほどおめでたい人だと言うべきでしょう。私たちは、自分のことを少しでも冷静に、客観的に見つめる

なら、自分が道端や石地や茨の中のような者であることを認めざるを得ないのです。しかしそのような私たちに、主イエスは、あなたがたは良い地だ、あなたがたにおいてみ言葉の種は百倍の実を結ぶのだ、と語りかけておられるのです。この主イエスの語りかけを聞き取り、受け入れるためには、大いなる発想の転換が求められます。つまり、自分がどのような人間であり、神様のみ言葉をどのように聞き、それをどのように実践し、どのような成果をあげているか、ということに注目し、要するに自分が生み出している実りを見つめているならば、そこに見えてくるのは、道端や岩の上や茨の中である自分であって、それ以外ではあり得ません。しかし私たちはその時、見つめるべきものを間違えているのです。種が芽を出し、育っていき、やがて実を結ぶのは私たち人間の力によることなのでしょうか？その実りは私たちが生み出したものなのでしょうか。勿論人間はいっしょうけんめい畑を耕し、水や肥料をやり、雑草を抜き、といった作業をします。しかしそれは、種が育って行って実を結びやすい環境を整えているだけのことであって、人間の力によって実を造り出しているわけではありません。実を結ぶ力は種の中にあるのです。そしてその種を私たちは自分で造り出すことはできないのです。信仰もそれと同じです。信仰は、私たちの中にもともとその種があって、それを私たちが努力して育てて行って実を結ばせるというものではありません。信仰の種は私たちが自分で造り出すものではなくて、外から蒔かれるのです。それを蒔いて下さるのは主イエス・キリストです。私たちがこのたとえ話を読む時に本当に見つめ、注目すべきなのは、種を蒔く人である主イエス・キリストなのです。自分はどの土地かと自分のことばかりを見つめ、自分が生んでいる実りにばかり注目している私たちの目を、種を蒔いて下さっている主イエス・キリストに向け、主イエスが蒔いて下さっているみ言葉という種に向けられていく、そういう発想の転換が必要なのです。

その時、それまで見えなかった新しいことが見えて来ます。道端や岩の上や茨の中のような私たち罪人に、それでもみ言葉の種を蒔き続けて下さっている主イエス・キリストのお姿が見えてくるのです。私たちは、み言葉を全く受け入れようとしなかったり、一旦受け入れても試練によってそれが枯れてしまったり、人生の思い煩いや富や快樂に塞がれてしまうことを繰り返しています。そのような私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さった主イエスのお姿が見えてくるのです。そしてその主イエスが、復活して今も生きておられ、私たちに忍耐強くみ言葉を語り続けていて下さる、そのみ言葉が聞こえてくるのです。それこそが「神の国の奥義」です。発想の転換によって、自分自身と自分が生んでいる実りを見つめることをやめて、種を蒔いて下さっている主イエスをこそ見つめ、蒔かれているみ言葉の種にこそ注目していくことによって、「神の国の奥義」が見えて来るのです。この「神の国の奥義」を見つめつつ生きるのが、主イエスの弟子、信仰者なのです。

「神の国の奥義」を、言い換えるならば、主イエスによって実現している神様の恵みのご支配という福音を見つめていく中で、私たちは、み言葉の種のための良い地となることができます。良い地とは、「立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます」であると語られています。しかしそれは、私たちが自分の力で立派な良い人間になるということではありません。「立派な良い心」というのは、み言葉をしっかり聞く心のことです。そしてそれをよく守るというのは、掟を守るとか、言いつけを守るという意味ではなくて、聞いたみ言葉を手放さずしっかりと持ち続けることです。忍耐してというものは、神の言葉である種が実を結ぶ時を忍耐して待つことです。つまり「良い地」になるというのは、私たちが自分の力で良い実りを生むことができるようになることではなくて、み言葉の種に本来備わっている力を信じて、それが実を結ぶことを忍耐して待つ者となることなのです。私たちの歩みにはいろいろな試練が襲ってきます。人生の思い煩いに苦しむことも、富や快樂に心を奪われることもあります。主イエスが私たちに求めておられるのは、それらに打ち勝つ強い人間になることではありません。それらの全てをかかえている私たちが、主イエスによって既に実現している神様の恵みのご支配、神の国の福音を信じて、主イエスが今も忍耐をもって蒔き続けて下さっているみ言葉の種を手放さずしっかりと持ち続け、それが実を結ぶ時を忍耐して待ち続けていくことをこそ主イエスは求めておられるのです。